

付録
雛形一覽

讃岐金刀比羅宮金比羅丸雛形

本雛形は、寛政八年（一七九六）に金刀比羅宮（香川県仲多度郡琴平町）に奉納されたもので、かつては絵馬殿に吊されていた。縮尺二〇分の一の菱垣廻船。船名は金比羅丸で、航と左右両舷の中棚に次のような墨書銘がある。

寛政八丙辰年六月吉日

大坂西横堀

奉献御宝前

富田屋三郎左衛門手船 金比羅丸悦蔵

同上敷屋島

棟梁 海部屋市左衛門

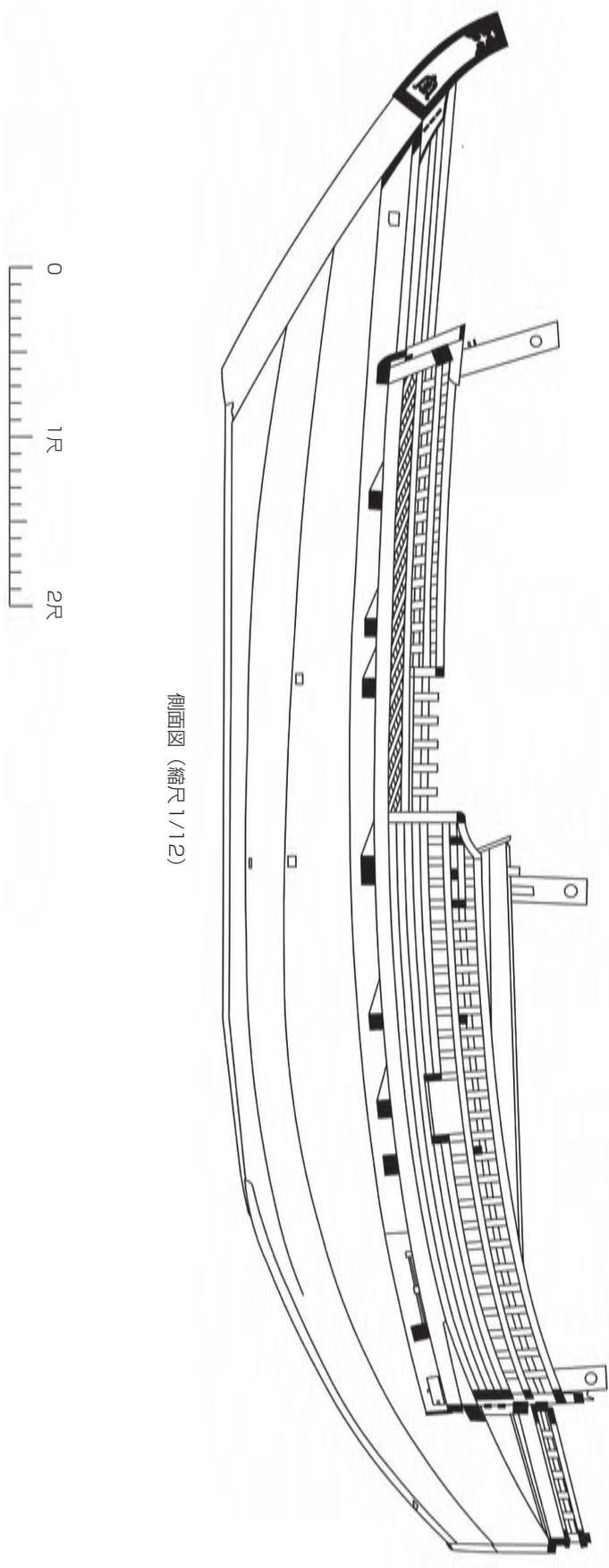
奉納者からしても、高い艫矢倉をみても、本雛形が菱垣廻船であることに疑問の余地はない。

実船に換算して、航長さ四五・九尺、肩二〇・九尺、深さ七・三九尺、大工間尺石数七〇八石である。一七世紀に航長さの五割以下であった肩は、一八世紀に入ると航長さの減少にもなって増大し、当時は五割を越えるのが普通であったから、本雛形の航は肩に比して長く、ために水押が立っている。

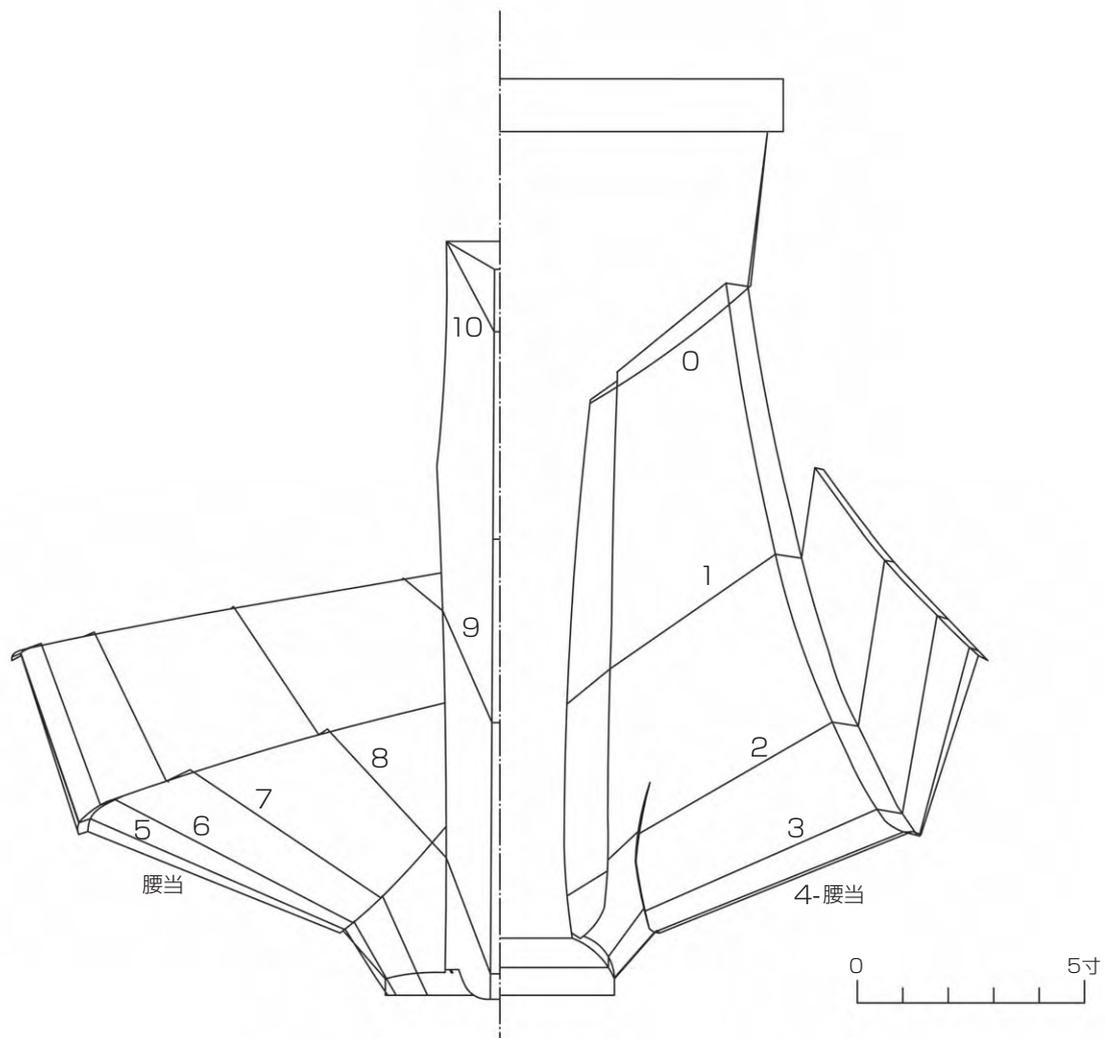
本雛形の出来のすばらしさは、他の江戸時代の雛形の追隨を許さない。本雛形がなければ、櫓を立てない時に艫の台間をどのようにしてふさいだかはわからず、寛政五年の「凡千石積二十分一之図」の「布板」の意味も理解できなかつただろう。艫の横台下の小さな庇は、本雛形をもって嚆矢とする。知里は角艫知里で、文化一〇年（一八一三）に浦賀奉行所同心今西幸蔵が『西氏家舶繩墨私記』に菱垣廻船について「艫は角艫多し」と記すのと符合する。ちなみに、角艫知里とは二階造りの外艫の知里をいう。



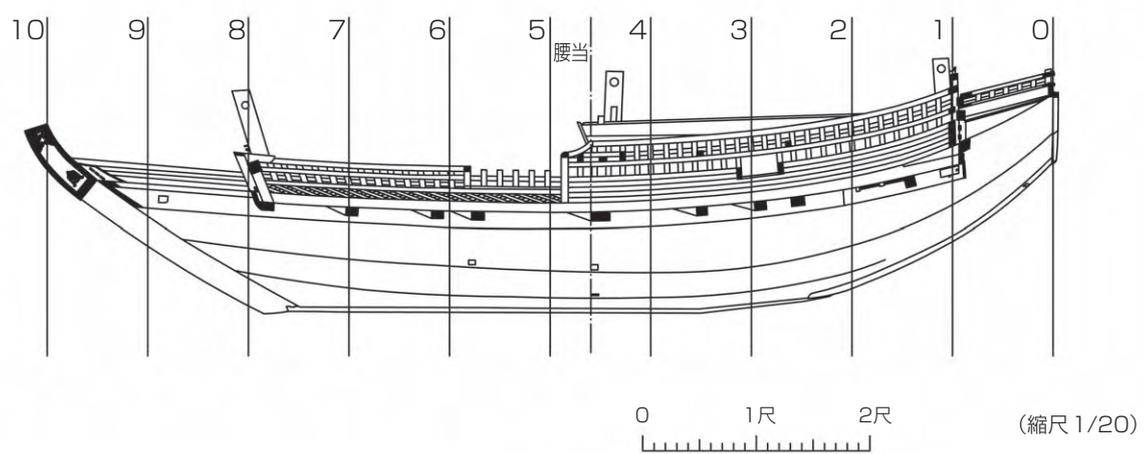




側面図 (縮尺 1/12)



断面图 (縮尺 1/5)



讃岐金刀比羅宮民吉丸雛形

本雛形は、享和二年（一八〇二）に金刀比羅宮（香川県仲多度郡琴平町）に奉納されたもので、かつては絵馬殿に吊されていた。縮尺は一〇分の一。船名は民吉丸で、航と左右両舷の中棚に次のような墨書銘がある。

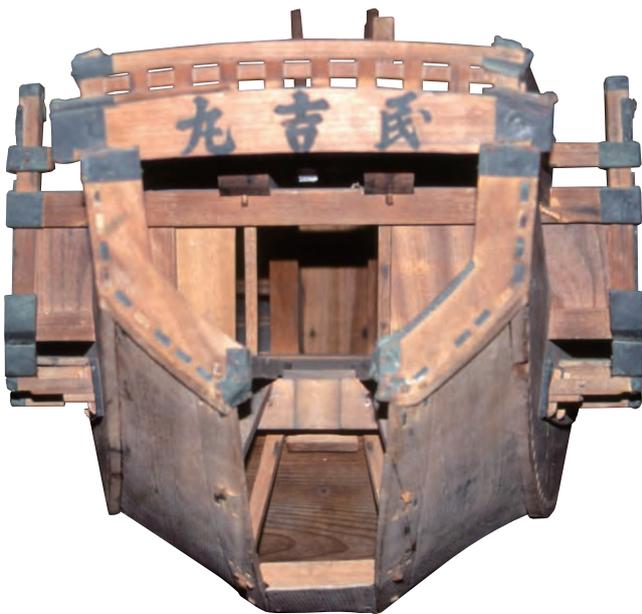
享和貳壬戌年 肥後大浜町 願主 民吉丸喜右衛門

奉納御宝前

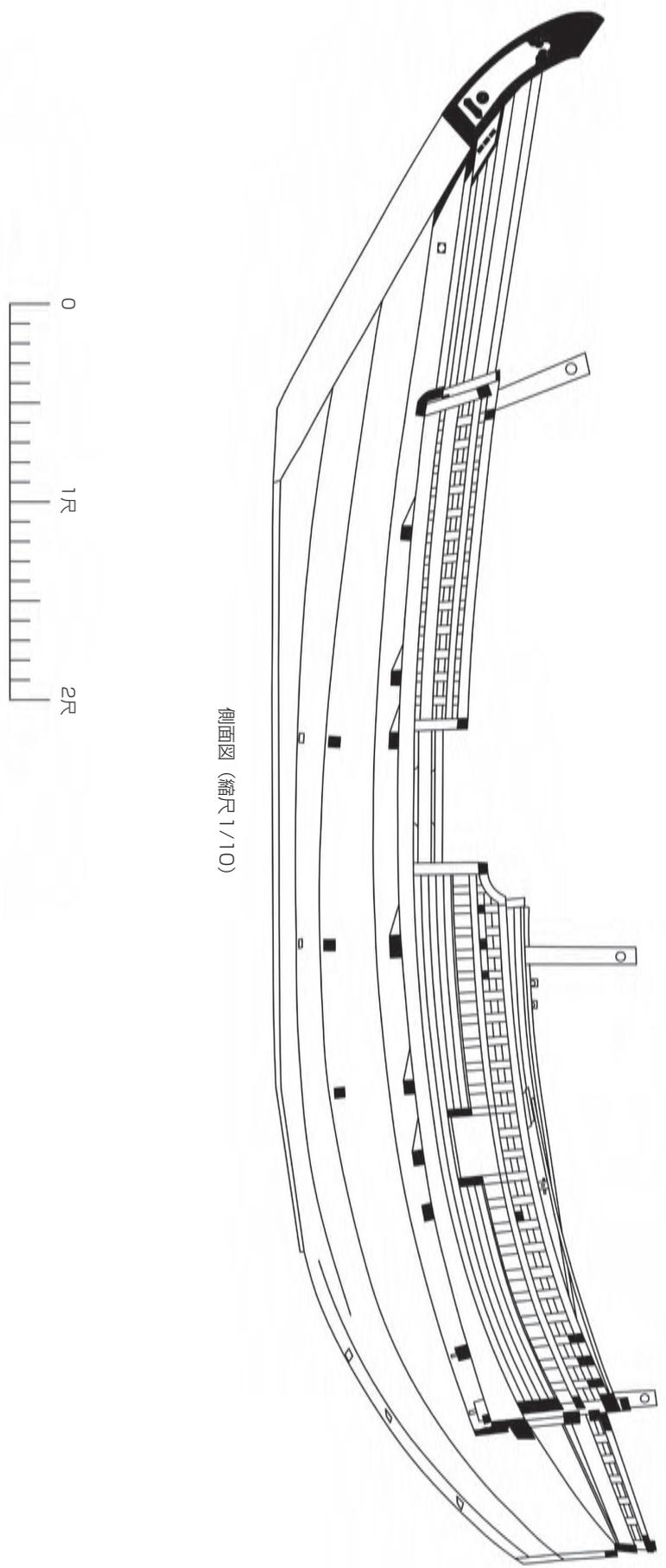
大坂敷屋町 播磨屋□右衛門

実船に換算して、航長さ三八・二尺、肩一七・四尺、深さ五・五四尺、大工間尺石数三六九石である。船体内部の下船梁・中船梁を省略する他はよく出来ており、伝馬込の二重の置台は本雛形をもつて嚆矢とする。なお、艫の横台下の小さな庇の初出を本雛形とする説は誤りで、寛政八年（一七九六）の讃岐金刀比羅宮金比羅丸雛形が初出である。

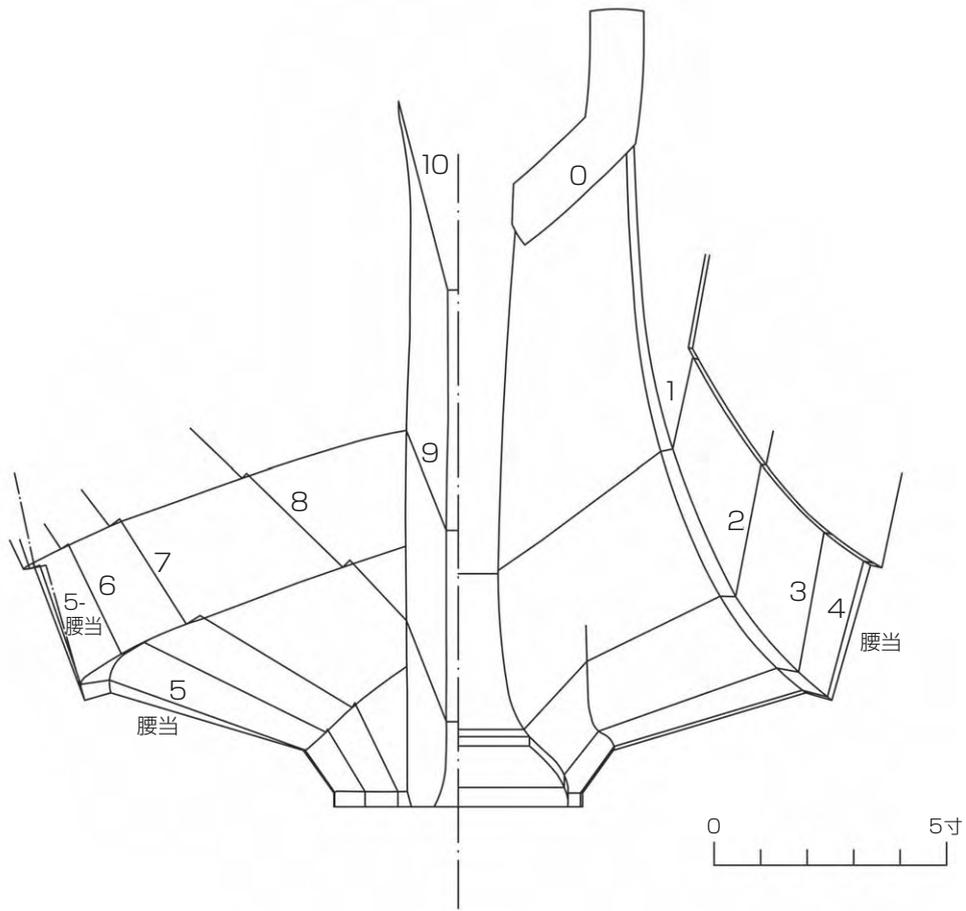
願主の住む肥後大浜町（玉名市大浜町）の外嶋住吉神社の御神体として祭られている正直新造雛形は本雛形と瓜二つであり、両雛形は同じ船大工の手になった可能性が十分に考えられよう。正直新造雛形は、明治四年（一八七二）の奉納銘のある水樽を積むところから明治四年の奉納とされているが、上廻りの様式は明治四年まではとうてい下がりえず、水樽だけが明治四年の奉納で、正直新造雛形の奉納は本雛形と同時期とすべきである。船体内部の下船梁・中船梁を省略する他は出来はよく、伝馬込の二重の置台も本雛形と何ら変わることはない。興味深いのは、唐人碇が一頭搭載されていることで、和船では他に使用例を聞かない。あるいは、案外、中国船の来港する長崎近辺で唐人碇が使われていたのかもしれない。



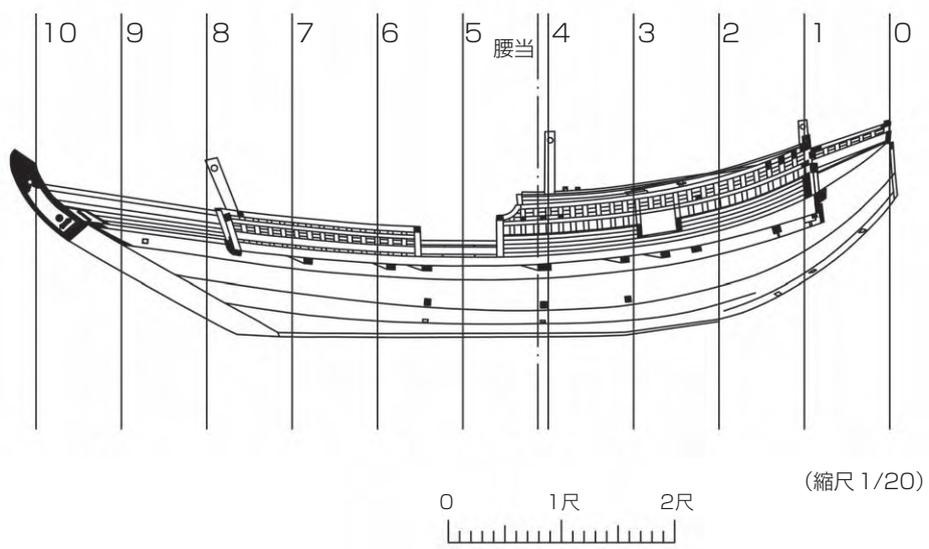




側面圖 (縮尺 1/10)



断面図 (縮尺 1/5)



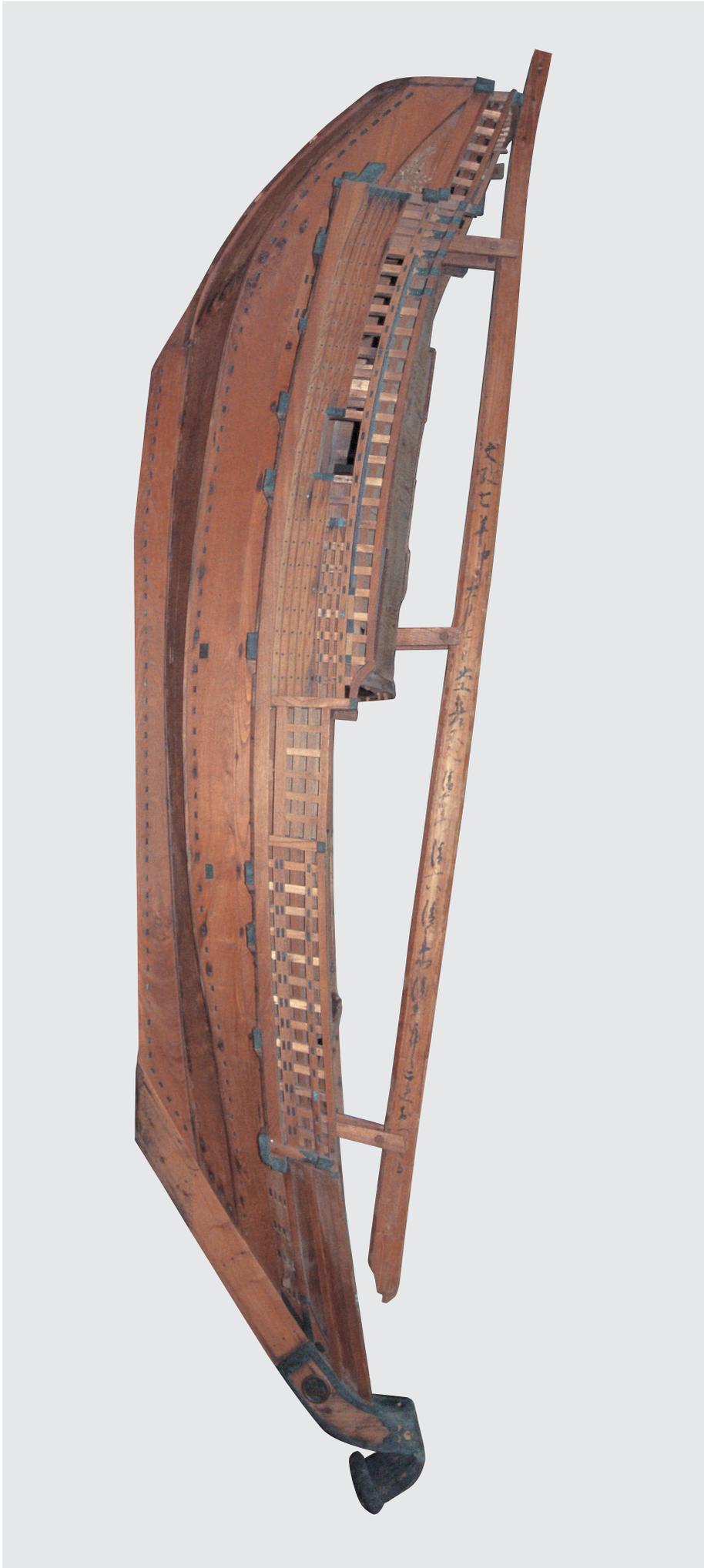
佐柳島八幡神社雛形

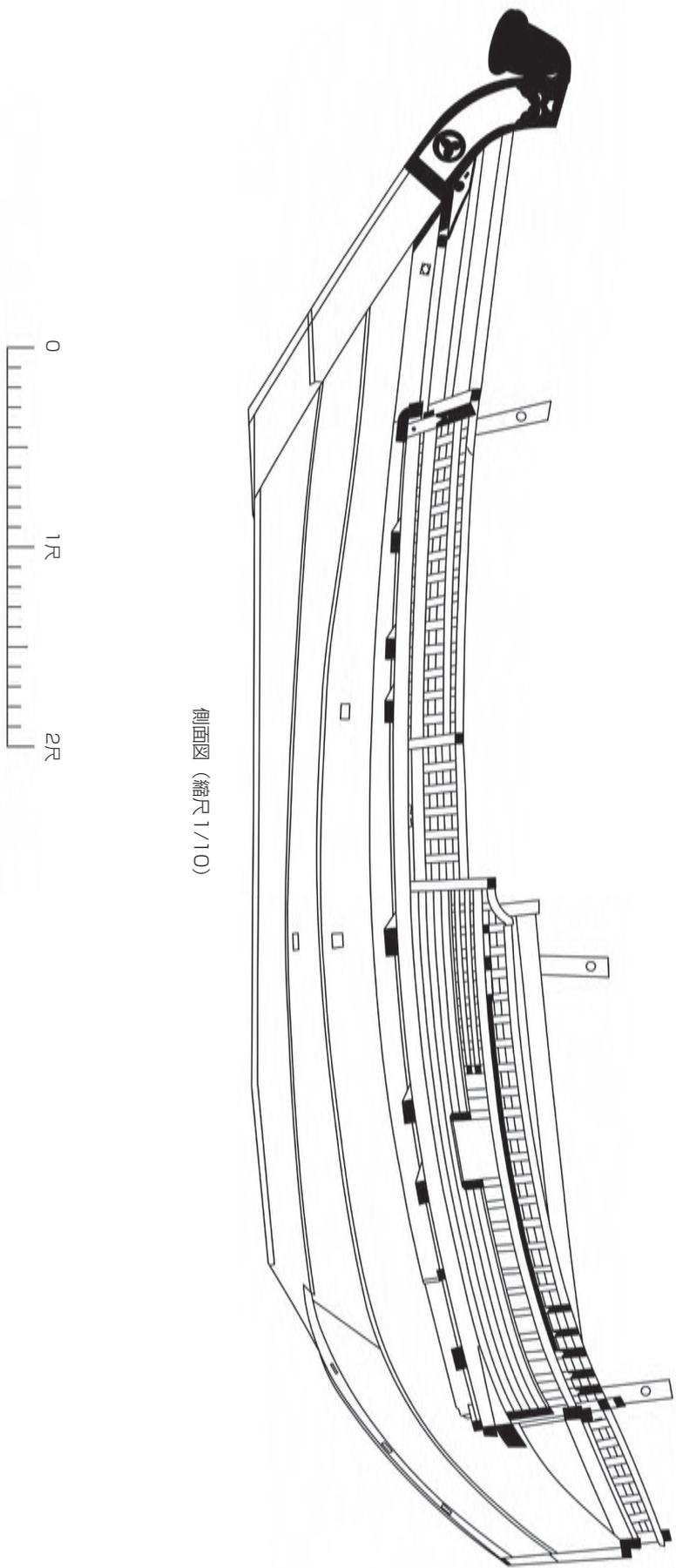
本雛形は、文政七年（二八二四）に佐柳島八幡神社（香川県仲多度郡多度津町大字佐柳）に奉納されたものである。船名は両社丸、縮尺は一〇分の一。実船に換算して、航長さ三七・八尺、肩一八・五尺、深さ七・一〇尺、大工間尺石数四九五石である。

通例、奉納年・奉納者は航や中棚の外面に墨書されるが、本雛形の場合、航と中棚の内面、舳塗間船梁、塗間船梁、碁板、帆柱、舵に墨書銘がある。なかでも重要なのが帆柱で、右舷側面に「文政七年申十一月吉日 大工善太夫・清右衛門・静六・清兵衛・清五郎これおつくる」とあり、左舷側面に「こくす六百石 ほがた式拾式反 両社丸 木割□□間違これあり候」とみえる。

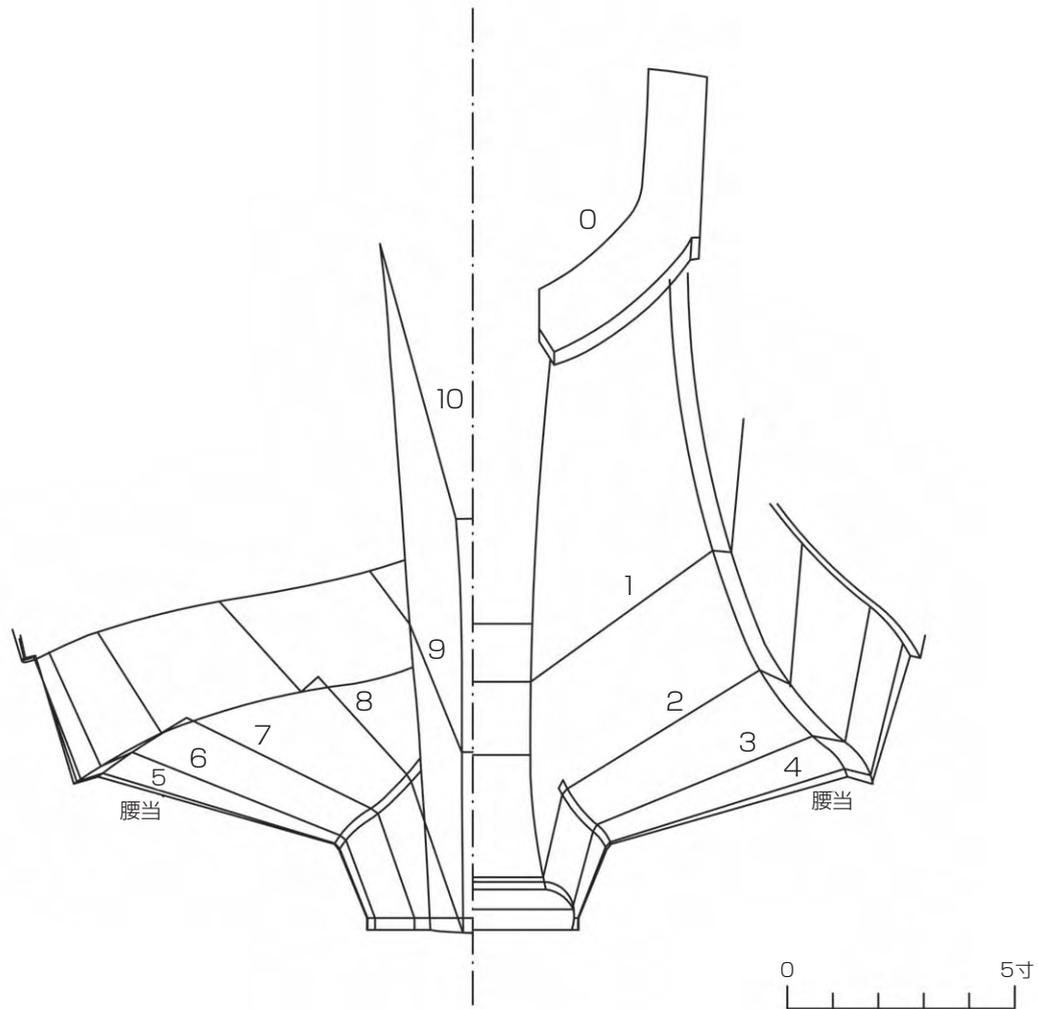
善太夫は木割に誤りがあるというが、木割には幅があるので、主要寸法に限れば特に不都合はない。善太夫の告白を見逃した石井謙治氏は、縮尺一〇分の一の正確な雛形で、当該期の形式を示す重要な基準作と本雛形を高く評価している。しかし、墨書された積石数と帆の反数との整合性まで問うと、話は別である。前述の主要寸法で算出した大工間尺石数は六〇〇石を大幅に下回るし、当時、帆の主流であった二・五尺幅の織帆による木割では肩一尺に付帆一反であるから、肩も狭い。明らかに善太夫が誤ったのは肩であり、六〇〇石積二二反帆なら肩は二二・四尺くらいは必要である。善太夫は製作中に木割の誤りに気づき、舵を正しい木割で作って、舵に「此梶無間違木割」と註記している。船体を一木から削り出した雛形では主要寸法の関係がおかしいことはままあるが、船大工が木割を間違えるのは珍しい。ちなみに、木割の誤りを別にすれば、本雛形の出来はよい。



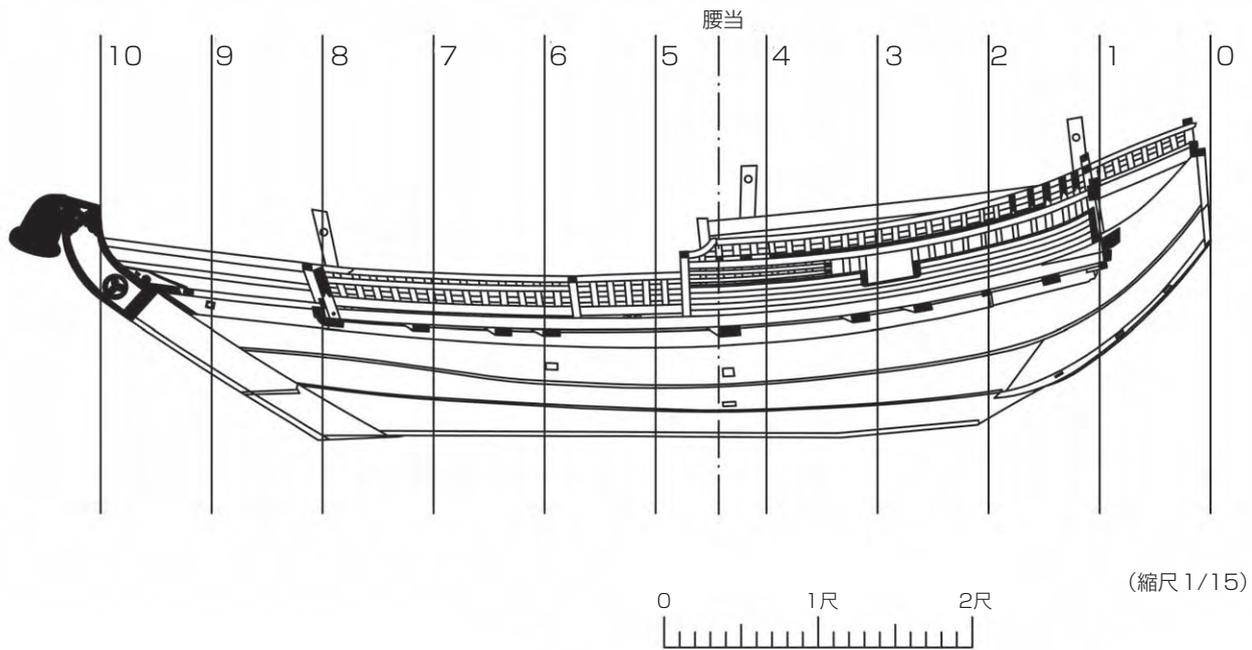




側面圖 (縮尺 1/10)



断面図 (縮尺 1/5)



相良大江八幡宮八幡丸雛形

本雛形は、文政七年（一八二四）に大江八幡宮（牧之原市大江）の御船神事に用いるために製作された八幡丸である。縮尺は一〇分の一。

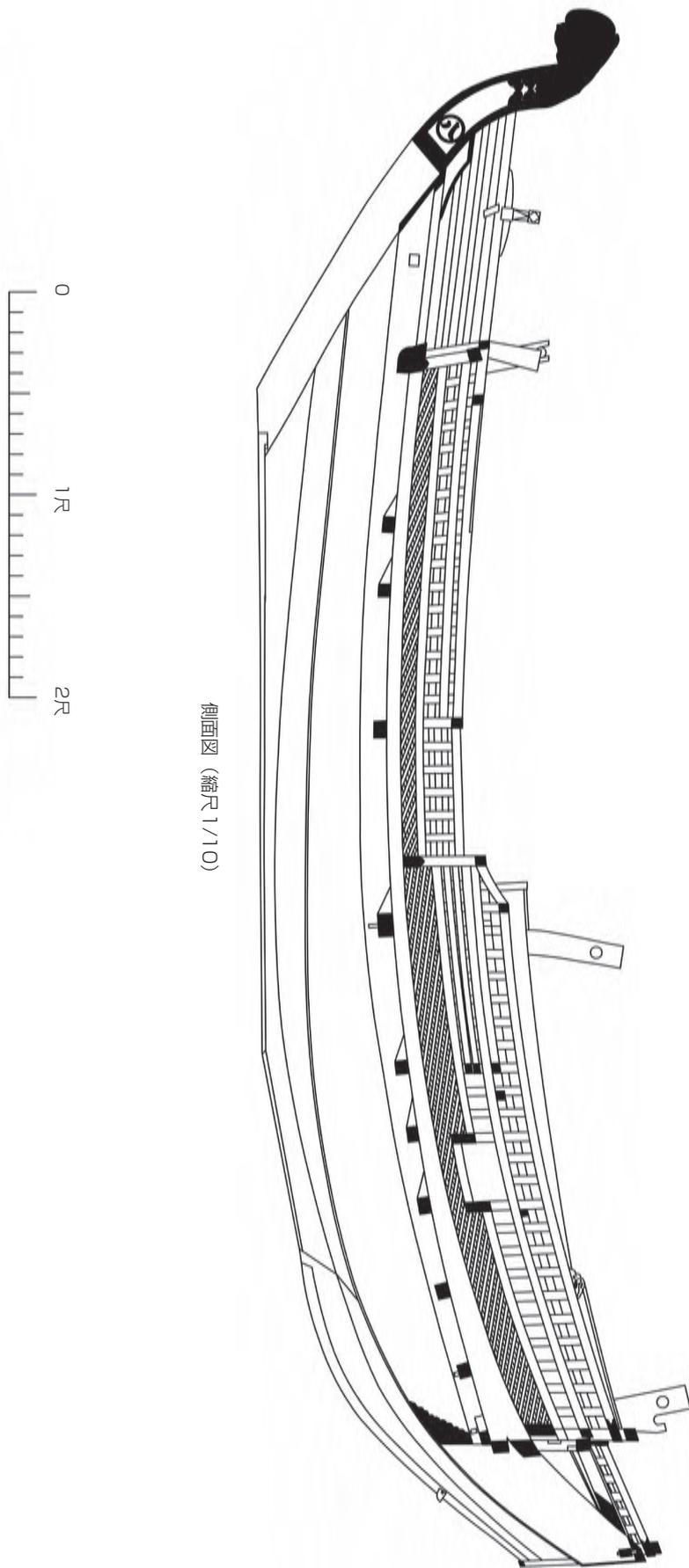
製作の経緯は、文政七年八月の『八幡宮御船造替掛金帳』にこう記されている。年を経たので「八幡様菱垣御船」を造り替えることが文政五年八月の船頭・水主の集会で決まり、廻船一艘一上下で船頭は一〇〇文、水主は三文を丸二年間積み立てた結果、文政七年に新造船が完成し、八月八日に台卸しを行った。ところが、船頭・水主の積立て金だけでは建造費をまかなえなかつたため、船主衆中には船一艘に付金一分、イサバ中には船一艘に付金二朱の掛金をお願いして、ようやく成就することができた、と。本書は船主衆中・イサバ中の掛金の記録なので、残念ながら、建造費の総額はわからない。

実船に換算して、航長さ三九・一尺、肩一八・五尺、深さ五・六四尺で、大工間尺石数は四〇八石である。帆の反数は一九反であるから、肩一尺に付帆一反の木割に合致し、帆が二尺五寸幅の織帆であることはいままでもない。

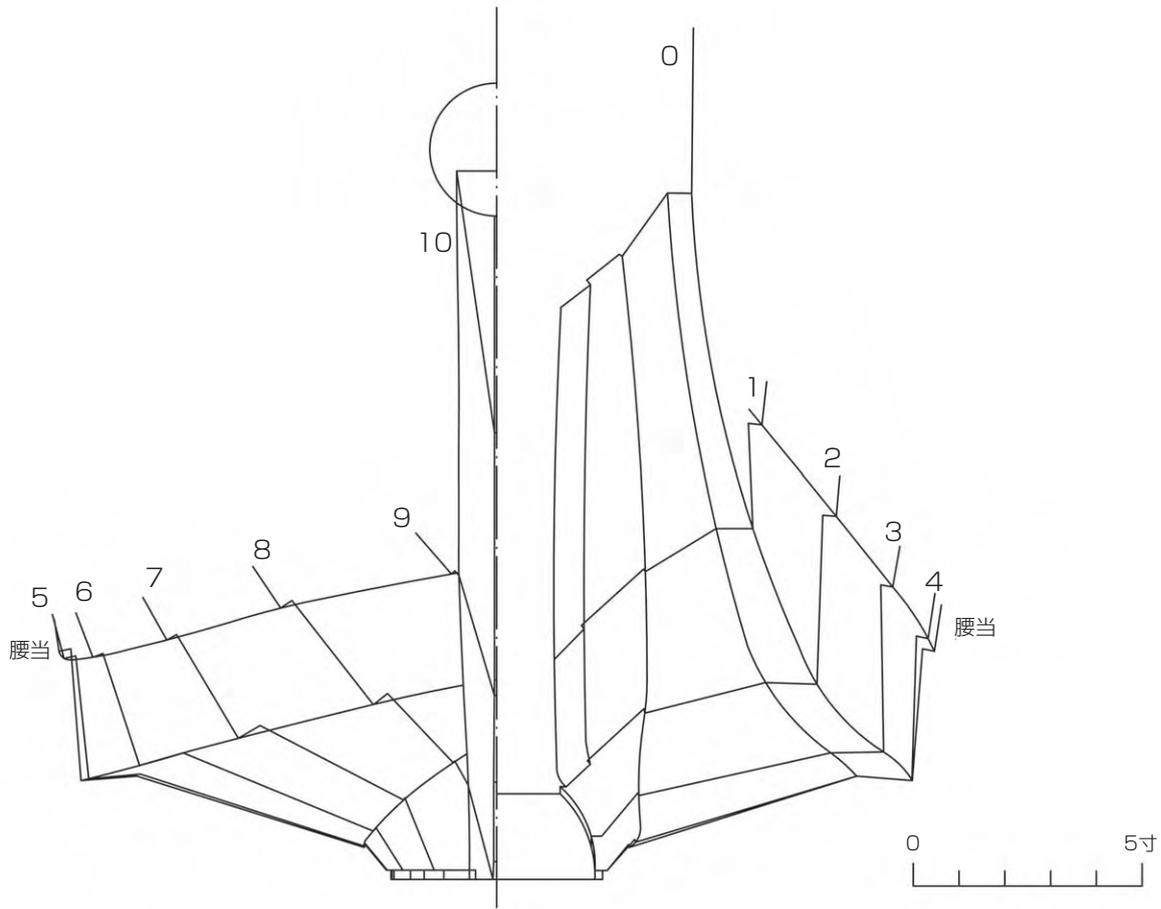
通例、本雛形は菱垣廻船とされている。菱垣廻船とは木綿・油・紙などの日用雑貨品を大坂から江戸に積み下した菱垣廻船問屋仕立の廻船をいい、垣立下部の菱組の格子と高い艫矢倉に特徴がある。確かに本雛形の垣立は菱垣であるが、艫矢倉の高さは実船に換算して六尺四寸と一般廻船並なので、菱垣廻船の条件を満たしていない。垣立が菱垣でも菱垣廻船とは限らないことは、熊野神社の御神船に明らかである。なお、菱垣廻船の艫矢倉は高く、「千石積菱垣廻船二拾分一図」と文化四年（一八〇七）の「太物丸雛形之絵図」が九尺二寸、寛政八年（一七九六）の讃岐金刀比羅宮金比羅丸雛形が八尺一寸である。



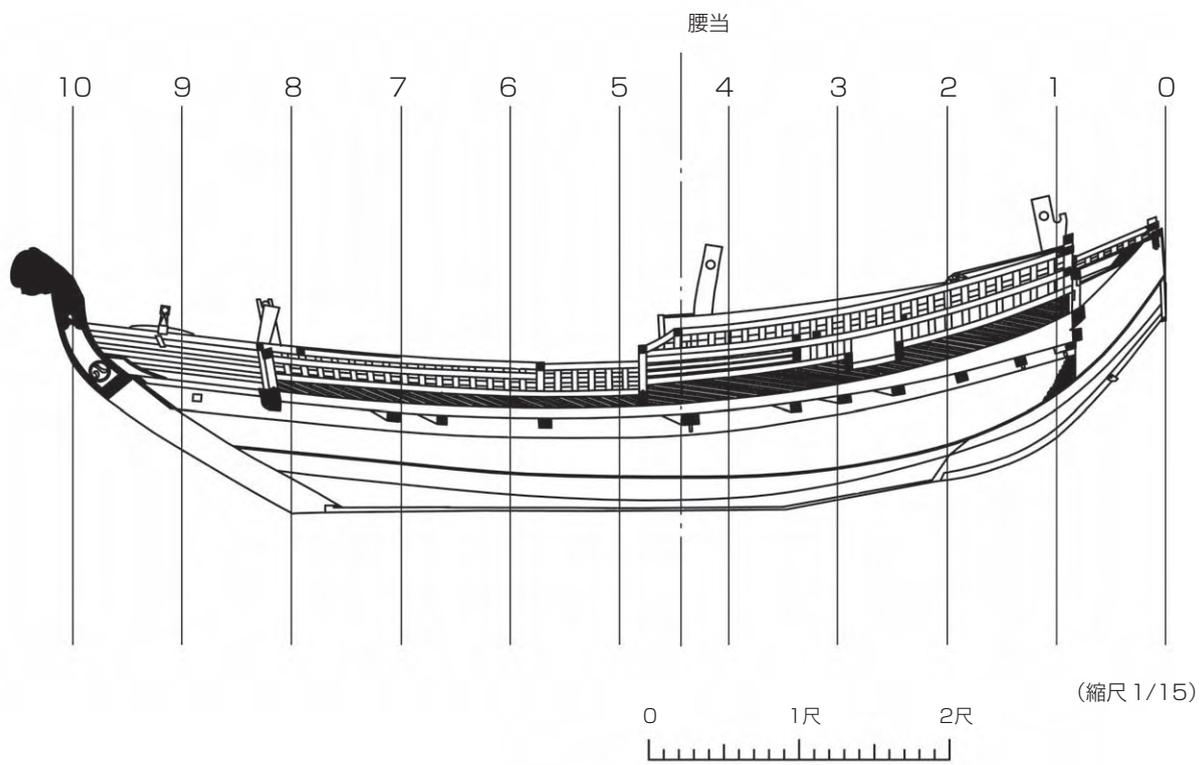




側面圖 (縮尺 1/10)



断面图 (縮尺 1/5)



(縮尺 1/15)

喜多浦大神八幡神社雛形

本雛形は、文政一三年（一八三〇）に喜多浦大神八幡神社（今治市伯方町）に奉納されたもので、かつては社殿に吊されていた。船名は八幡丸、縮尺は一〇分の一。今日では航の墨書銘は読みがたいが、『瀬戸内海の海上信仰調査報告（西部地域）』によると次のように記されている。

大工柳□□

□政□三年 願主 □□中村重左衛門

佐□□

奉寄進

惣船中

同芸州御手洗

八月吉祥 同 塩間屋大□□

同 □□

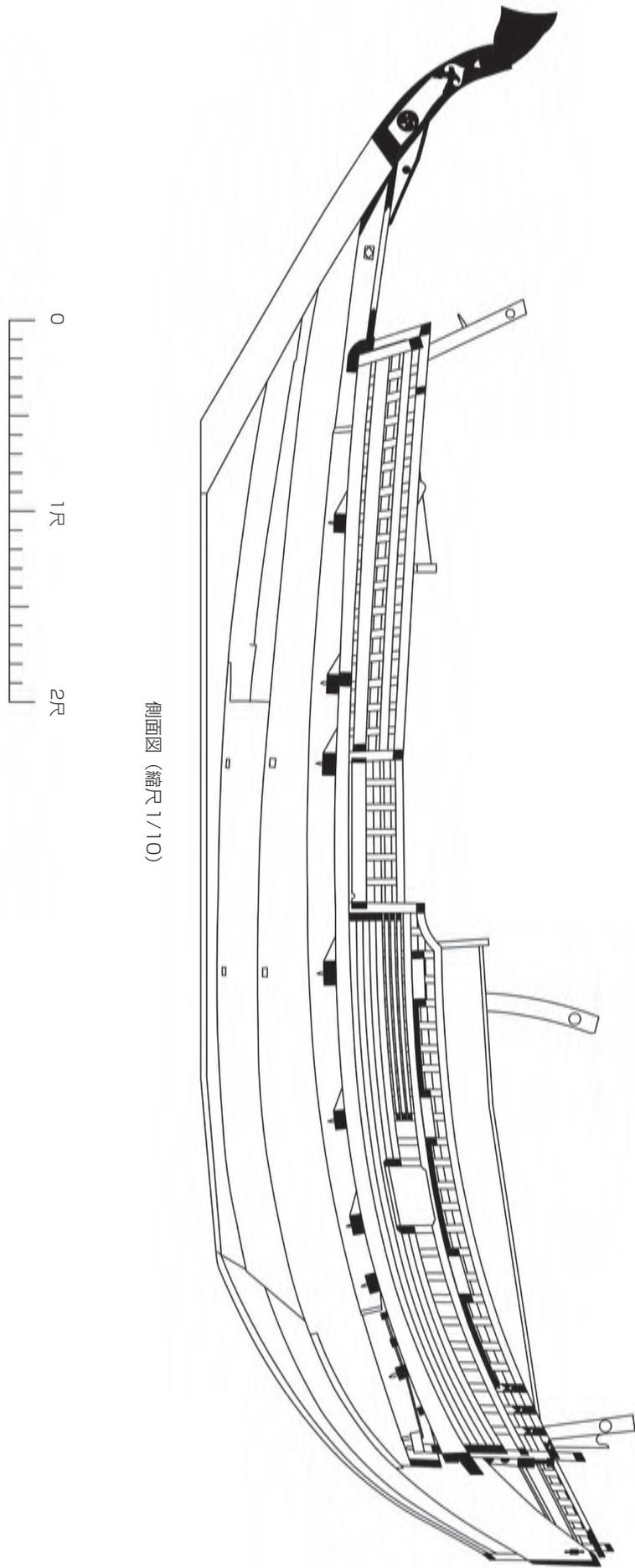
同 □□下

実船に換算して、航長さ三九・一尺、肩二〇・〇尺、深さ六・四四尺で、大工間尺石数は五〇三石である。本雛形はよく出来ており、文政期の様式を知ろううえで相良大江八幡宮八幡丸雛形とともに欠かせない。

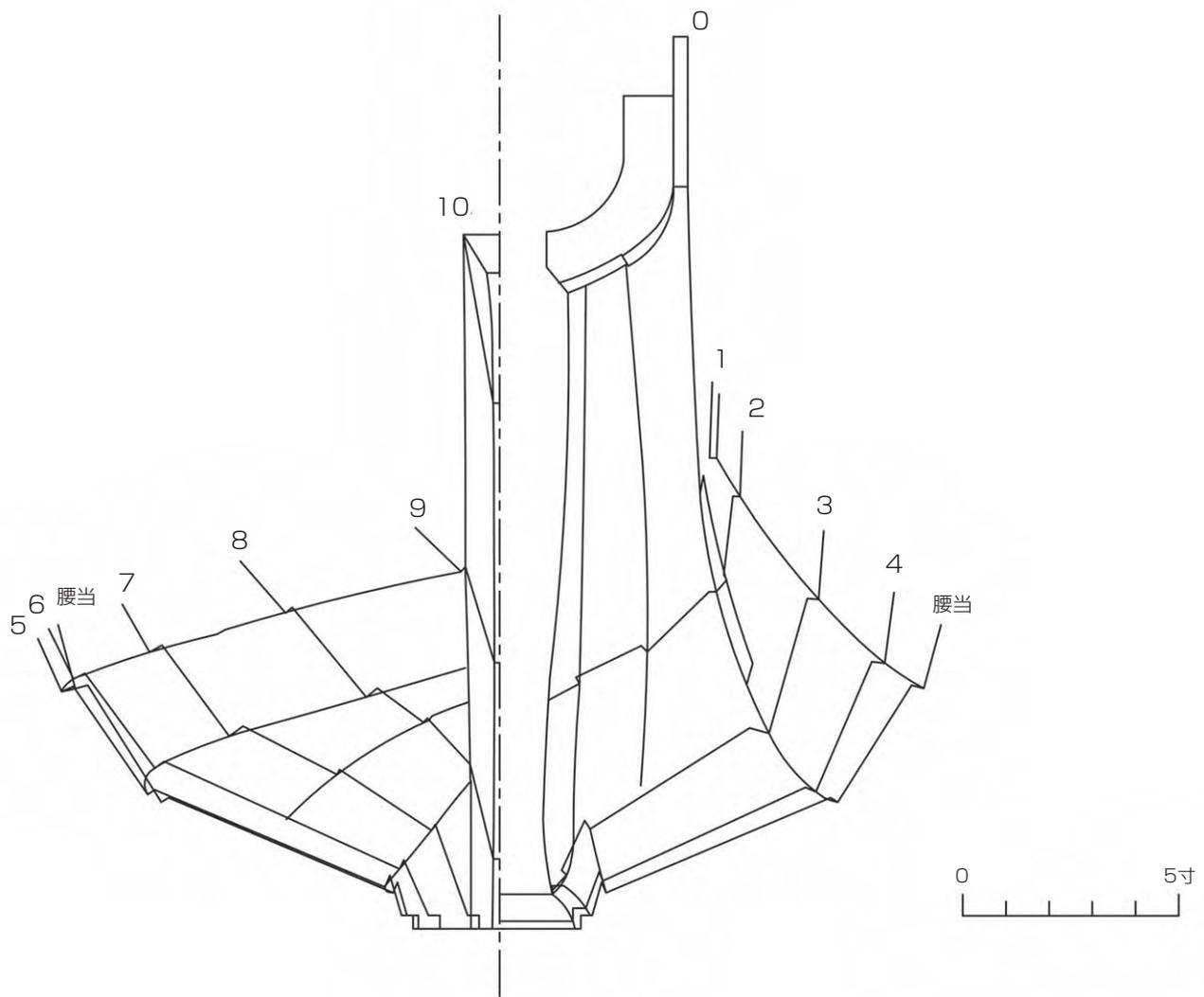
本雛形で興味深いのは、四通りが表現されていることである。四通りとは、水押から腰当にかけての中棚の開きの変化が大きいため、三の間付近から水押までの中棚を二階造りもしくは三階造りにする板材をいう。実船通りに四通りを作ることは雛形ではむづかしく、本雛形では四通りの統合部を削り出して釘頭を墨で描くにすぎないが、東京国立博物館薩摩形雛形や鉄道博物館雛形のような船体構造をみせる雛形を別にすれば、四通りを表現する雛形は珍しく、他にモースが持ち帰った幕府の御城米積船の雛形（ピーボディ・エセックス博物館蔵）があるにすぎない。ちなみに、弁才船は船喰い虫対策として船体に包板を打つため、実船では外からみても四通りの存在はわからない。



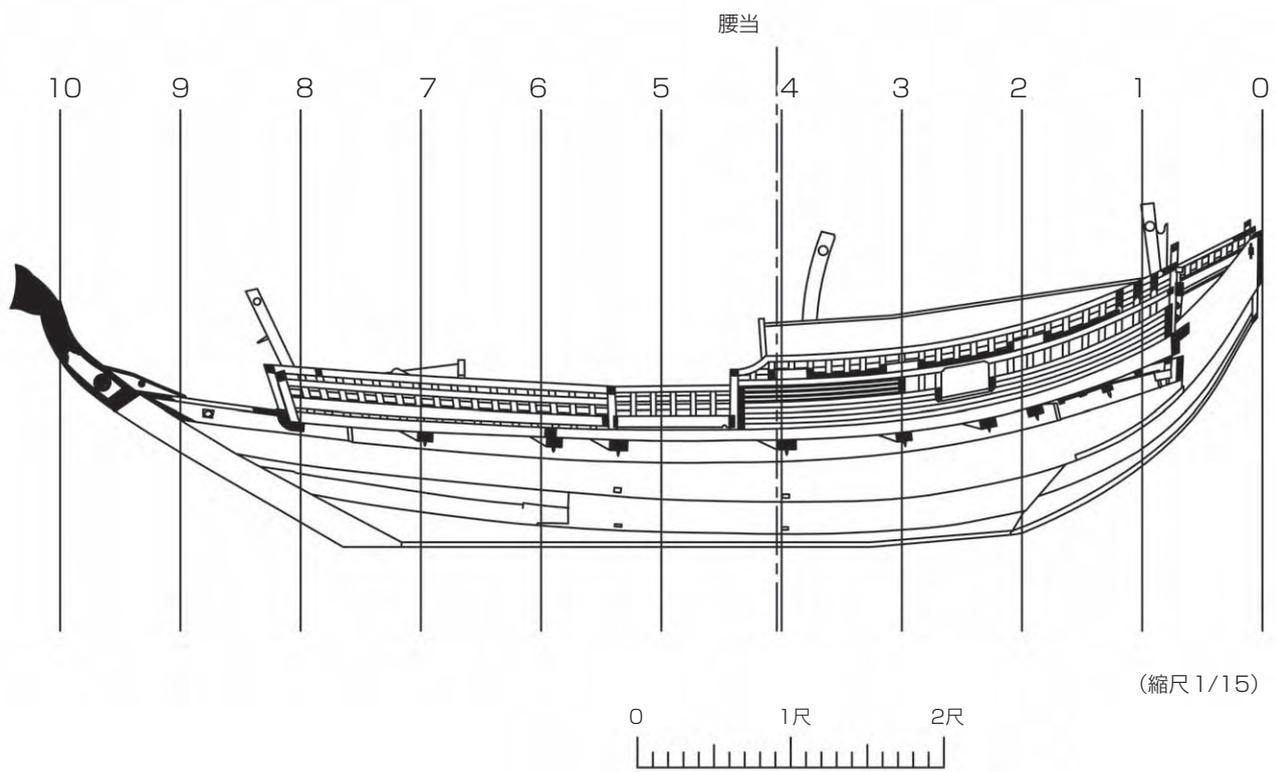




側面圖 (縮尺 1/10)



断面図 (縮尺 1/5)



小浜若狭彦神社雛形

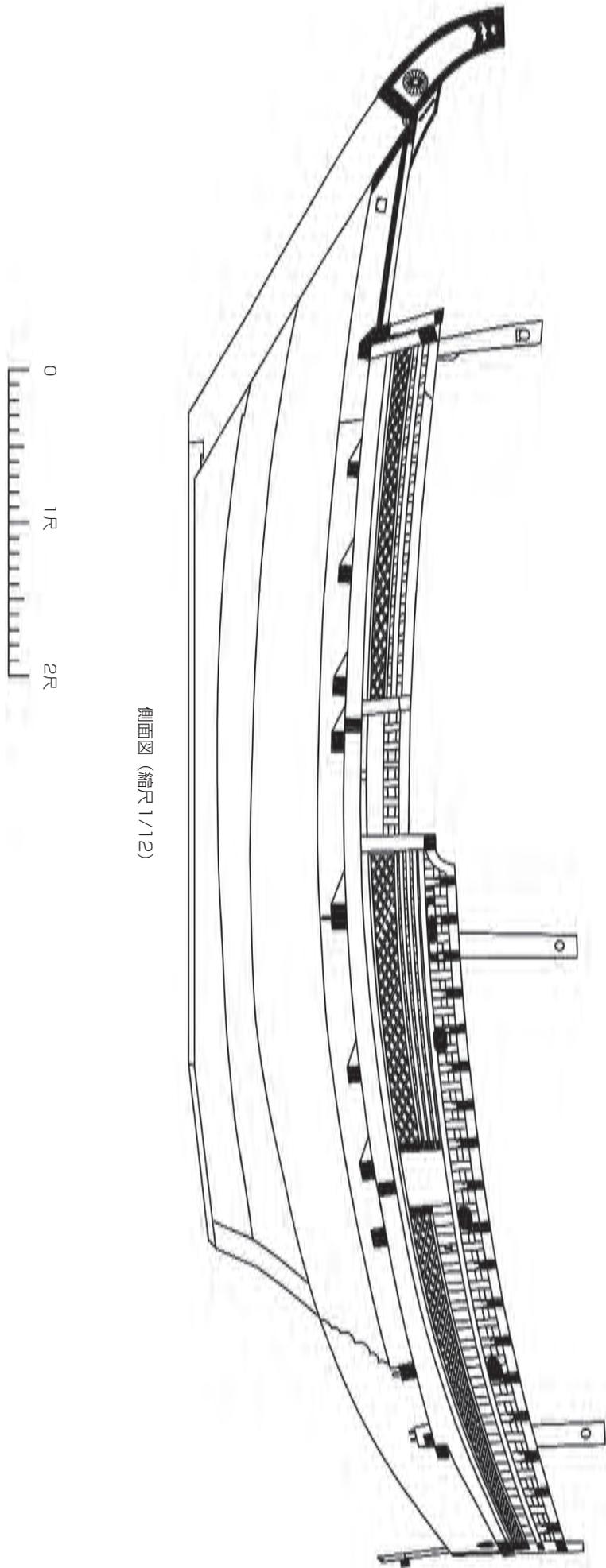
本雛形は、海幸山幸の神話で有名な彦火火出見尊を若狭彦大神として祀る若狭彦神社（小浜市遠敷）に奉納されたもので、現在は若狭歴史民俗資料館に寄託されている。船名は海幸丸、奉納年・奉納者ともに不明。縮尺は10分の1。実船に換算して、航長さ四八・五尺、肩二五・六尺、深さ九・二五尺で、大工間尺石数は一一四九石である。

垣立に菱垣を組むため、本雛形の製作年代の推定はむつかしいが、反りの小さい船首尾と開口の舳の立に達した掛筋と低い垣立からすれば、天保期（一八三〇～一八四三）だろう。一見して外観に北前船を思わせるところは少ない。ところが、船内をみると、北前船の特徴の一つで、船底構造の簡素化と強度の向上に寄与する一石二鳥の名案と石井謙治氏が高く評価した中船梁兼用の湾曲した下船梁が入っている。兼用船梁の初出は天保八年（一八三七）の丹後溝谷神社雛形であるから、ことによると出現時期が若干上がるかもしれない。

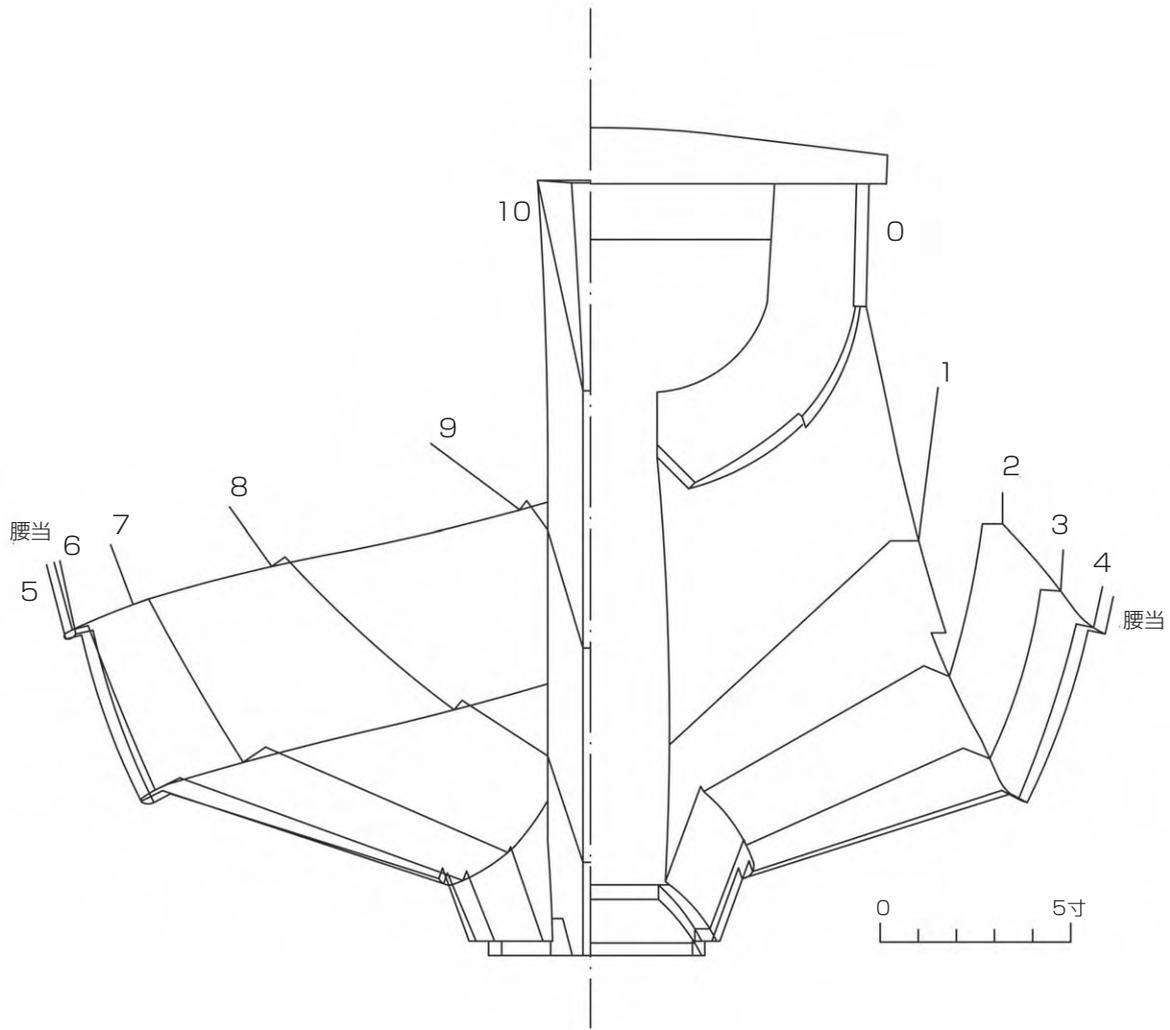
本雛形のように垣立下部に菱垣を組み、上廻りを押廻し造りにする雛形は若狭湾沿岸では珍しくない。宗像神社（小浜市北塩屋）の弁天丸、金毘羅神社（同前）の金毘羅丸、広嶺神社（小浜市千種）の天王丸、老人嶋神社（舞鶴市冠島）の明神丸がそうである。これらの雛形は、菱垣廻船の図面や雛形と比べて菱垣が細く、艫矢倉も高くないから、菱垣廻船でありえない。また押廻しは金沢兼光の『和漢船用集』に言及があり、明治時代の写真にも姿をとどめているので、実船の可能性はある。しかし、一地域に集中し、しかも菱垣と組みになっているところをみると、菱垣を真艫まで回して、装飾効果を高めることに眼目があった可能性のほうが大きいだろう。







側面圖 (縮尺 1/12)



断面图 (縮尺 1/6)

